演題「子どもを台所に立たせよう」

講師の竹下和男氏は、現職中に、「子どもだけで作る“弁当の日”」を滝宮小、国分寺中、綾上中で実施し、退職後も“弁当の日”を広げるために全国で講演や執筆活動を精力的に行っている。講演回数は 2000 回を超え、実施校も 47 都道府県 2000 校を超えるという。その熱気が伝わってきた講演でした。以下は要旨です。都合がつかず拝聴できなかった会員の皆様、ぜひご一読を・・・。

「人は置かれた環境に適応する」

講演先の学校で「朝、家族のためにご飯とみそ汁の朝ごはんを家族全員のために一人で作れる人？」という問いかけの答えに「適応」の実態が見える。小・中学生、高校生ともに１％未満なのだ。それは朝食を作らなくていいという環境に適応している若者たちの姿である。全国の小学校で、10 年以上前から**運動会の弁当が学校給食に変わり始め**ていた。それがここ数年では、午前中で運動会が終わる市・町が増えているそうだ。「運動会の弁当を作るのが面倒だ、作りたくない」という保護者世代のニーズに応えた結果という。戦後の「受験地獄」という流行語は、わが子の将来の幸せを願う親たちによって今も過熱し続けている。**家事労働から解放して、受験勉強に取り組ませる環境にどっぷりつかった子どもたちがやがて大人になり、料理やわが子の育児さえも疎ましく思う親になっている現実**は、まさしく人が育った環境に適応している現象である。

「人は環境を変える脳を持っている」

料理を作ることは楽しい、それを家族が食べてくれることはうれしいという心と体が形成されるように人間の脳は進化してきた。だから幼児は台所に立ちたがる。「お母さんやらせて。ぼくも料理したい」「手伝おうか」「何かできることある？」といいながら。小さい時から台所に立った娘さんが育児好き、料理好きの母親に育っていた。前述の 3 校の“弁当の日”の卒業生たちは、23～30 歳になり、料理を苦にしない親になっているそうだ。**本当に大切なことの基礎は幼少期に出来上がる**ことを踏まえて、子どもだけで作る“弁当の日”を全国の学校で実施することで、**全国に「“弁当の日”世代」を育てたい**という。**「“弁当の日”世代」とは「子育てが楽しいと言い切る大人」「今よりもいい社会を作ろうとする大人」が定義**である。

「はなちゃんのみそ汁」「みんながみんな英雄」「見えないプレゼント・滝宮小編」「先生に聞いてほしい話がある」等のスライドショーはどれもすてきな映像とＢＧＭがマッチし、子どもたちへの愛にあふれ、参加者の誰もが共感し涙する内容であった。家族や地域の方たちにもぜひ聞いて欲しいものである。